



『二見出身パラリンピアンに学ぼう』

～自分がいきいきと輝けるものが みんなある～

パラリンピック選手（スラローム・アーチェリー・卓球・車いすバスケットボール）

（ドイツ、ハイデルベルグ大会 メダリスト金・銅）

前中 智佐美選手

日時：令和2（2020）年

10月19日（月曜日）

9：30～ 4・6年生
（10：30～ 4年のみ体験会）

場所：二見北小学校 体育館



2020年、本来ならば今年は日本でオリンピック・パラリンピックが開かれ、世界中の選手が世界中の夢と希望をもちよって集うスポーツの祭典となる予定でした。本年開催は見送られましたが、選手たち（オリンピック・パラリンピアン）は今日も鍛錬を重ねています。オリンピックパラリンピックには、当日だけではないたくさんのドラマが日々くり広げられています。

そこには、選手だけでなくたくさんの人々が関わり合っていて、国籍や人種、また身体的な違いも超えた交流が輝いています。人間の知恵や工夫、努力、そして愛・・・多くのことを感じ取れるよい機会です。

国際理解教育・異文化共生教育・福祉教育・ユニバーサル社会・心と体のバリアフリーなどの観点からもこのオリパラ事業は展開されています。二見北小学校はその指定を受け、今回は、二見出身二見在住の前中智佐美さんにおこしいただいてご講演いただきます。（傍聴は9：30～の部のみ。車いす体験は4年生のみとなります。）

車いすでも全てのことを一人でやってのける前中さんの日々の暮らし方も教えてもらいます。

傍聴希望の方は、下記にご記入の上、お申し込みください。

感染症拡大防止対策にご協力ください。お問い合わせは、教頭まで。

オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業② 二見北小学校 講演会（10月19日）

傍 聴 希 望 票

氏名（ ）

お子様（ ）年（ ）

【講師紹介】前中 智佐美さん

兵庫県のパラリンピックの歴史のはじまりは、1972年夏のパラリンピック・ハイデルベルク大会に出場した前中智佐美さんです！

兵庫初の金メダルに輝いたのは、**陸上スラローム**。スラロームは路面に置かれた旗の間や台上を通るだけでなく、後退や回転も求められる。いかにミスなく走り抜けるか。順位はタイムで争った。当時18歳だった前中さん、「とにかく旗に当てず、速く、前に。後退と回転は前輪を上げて。その方が四輪で動くよりも速いから。そんなことをしていたのは日本人ぐらい」 繊細かつ大胆な操作で順調に課題をクリア。最後の直線は息切れし、腕の力も残っていなかったが、必死に車輪を駆り、世界の誰よりも速くゴールした。

2歳の時、下半身の自由を奪う「脊椎カリエス」を発症した。幼稚園に通えず、友達の輪に入れなかった。地元の明石市立二見小に入学すると、自転車に乗れるまで回復したが、5年生の2学期に病状が悪化。卒業まで一度も学校に行けなくなった。二見中（今の二見北小学校の建物です。中庭に金メダル獲得の碑があります。）には松葉づえで登校したが、小学校と同じく、体育も運動会も全て見学。修学旅行にも行けなかった。卒業した70年春、両脚の機能回復を目的に兵庫県玉津福祉センター（現・県立総合リハビリテーションセンター＝神戸市西区）に入所。入った瞬間、障害のある人たちと出会えてほっとした。小中学校は元気な人たちと一緒にいたから。年齢が一番下。両親と同世代の人もいる環境で歩行訓練を始めたが、補助装具を着けても歩様は安定しない。友達と同じようには歩けない。「そうだ、自分には車いすスポーツがある！」

最初は**卓球**だった。そして、本格的に**スラローム**と**アーチェリー**に取り組んだ。施設裏の坂道を吐くまで走った。鏡の前ではまめだらけの手を伸ばし、弓を射るフォームを固めた。

入所翌年、17歳で全国身体障害者スポーツ大会に初出場し、両競技で優勝。続くパラリンピッククイヤーの72年5月には、スラロームで当時の世界記録を2秒縮める1分6秒をマークした。一躍金メダル候補となり、本番前は朝から夕方まで強化練習を続けた。大会では専門外を含めて8種目に出場し、アーチェリーでは銅メダル。お盆に帰国すると、明石の街には「祝パラリンピック優勝 帰郷歓迎」の看板が立ち、バイクのサイドカーに乗ってパレードした。地元の人たちが待つ終着点には「智佐美嬢」のちょうちんも揺れ、日本代表の公式ジャケットは手で絞れるほど汗でびしょりだった。

当時、個人種目のパラリンピック出場は「生涯1回」と聞かされていた。22歳で結婚し、スポーツから遠ざかるも、27歳で**車いすバスケットボール**を始めた。後に皇后杯全日本女子選手権となる全国大会をチームメイトと立ち向かい、38歳まで競技を続けた。



〔神戸新聞 2020年6月9日より〕